

73

東京医科歯科大学歯学部解剖学教室が収蔵する ゾウの頭蓋骨について

秋本 和宏¹⁾, 阿部 達彦²⁾¹⁾武蔵野市開業, ²⁾東京医科歯科大学

はじめに

ゾウは原生の陸生哺乳類中で最大の種であり、動物園やサーカスの花形である。その特異な上顎第二切歯（牙, tusk）と水平交換を行う臼歯は比較解剖学的にも歯科医学的にも貴重な種である。東京医科歯科大学歯学部解剖学教室（現顎顔面解剖学分野）標本室には多くの頭蓋標本が収蔵されており、その中にはゾウの標本も複数存在する。今回、これらのゾウの出自について調査しわかったことを報告する。

解剖学教室所蔵のゾウの標本について

東京医科歯科大学歯学部解剖学教室では、ゾウの頭骨3つ、下顎骨2つと下顎骨の半側1つを収蔵している。標本が複数存在するため、1番大きな頭骨を標本A、次に大きく牙のある頭骨を標本B、標本Bと対になる下顎骨を標本C、小ゾウの頭骨を標本D、半側の下顎骨を標本E、比較的小型の下顎骨を標本Fと記す。頭骨（標本A, D）に共通する特徴として頭蓋冠が開けられており、脳を取り出した形跡がみられる。通常、骨格標本を製作する過程では頭蓋冠を切断せずに行うとされ、脳の浸漬標本あるいは切片を作製することを目的として頭蓋冠を切断したものと考えられる。ゾウの脳の標本に関しては歯学部解剖学教室には現存せず、記録上ではこれらの脳についての研究発表者も見当たらないため骨標本として所蔵しているものと考えられる。また臼歯の形態からこれらの標本にはアジアゾウ特有の咬板がみられることから、すべてアジアゾウの標本であると考えられる。標本Aには牙は存在しないが、側切歯歯槽窩は大きく、生前は大きな牙があったものと思われ、これはオスのアジアゾウの特徴である。標本BとCは同一個体のものと思われ、この標本にも大きな牙が特徴であるのでオスのゾウであると考えられる。標本DとEはサイズが小さく、子供のゾウであると考えられる。標本Fは対となる頭骨がない。

解剖学教室とゾウの標本について

東京医科歯科大学歯学部（東京高等歯科医学校）の島峰徹校長は小金井良精（東大名誉教授・解剖学）と同郷であり、一時期東大解剖学教室に籍を置いていたこともあることから、東大医学部解剖学教室とは強い繋がりがあったと考えられる。また、東京高等歯科医学校解剖学教室初代教授である藤田恒太郎も東大医学部解剖学教室出身であり、戦後東京大学医学部解剖学第二講座へ教授として転出している。東京医科歯科大学医学部解剖学教授を務めた万年甫は、“動物の脳取集記（中央公論新社）”の中で、藤田恒太郎教授は戦前にゾウの解剖をしたこと記した。またゾウの標本台（標本B用）には東京高等歯科医学校の備品プレートがついており、戦前にゾウが少なくとも1つは収蔵されたことがわかる。

標本室に付記された説明文について

標本Bには、“インド象の頭骨 上野動物園で飼育中、病気で昭和17年に死亡したインド象。臼歯を調べてみると5才ぐらいと推定される。オス。キバつきの頭骨はめずらしい。一東京医科歯科大学出品一”と付記された説明文が書かれている。しかし、“上野動物園百年史（第一法規出版, 1982）”や“物語 上野動物園の歴史（中公新書, 2010）”に昭和17年に死亡したゾウの記録は見当たらない。よってこの記載内容には誤りがあると考えられる。